

組織的に取り組む

授業改善

～学校経営の中心に授業改善をおく～

「経営（マネジメント）」とは、目標達成に向けて、様々な資源を活用し最善の手段により組織を動かすことです。それを「学校経営」にあてはめるならば、校長が示した「めざす学校像」を具現化するために、最も有効な手段により学校運営を行い、教育の質の維持・向上をめざすということになります。

各学校には、めざす生徒像の実現に向け、学校の特色や地域性を踏まえた学校教育目標があります。そして、学校教育目標の実現に向けて日々の教育活動が繰り返し行われています。授業改善に向けた取組みもそのひとつではないでしょうか。

さてここでは、「授業改善」を通して学校経営を考えるという視点から、「組織的に取り組む授業改善」について提案したいと思います。

学校は、生徒が学び高め合う場所です。学校生活の大半は授業であり、教職員は授業を通して生徒と多くの時間を過ごしています。つまり、よりよい授業を行うこと、生徒とともに授業を作り上げていくことが、学校教育目標の実現に向けて最も有効な手段であるということです。

「授業改善」を学校経営の中心に据えることで学校としてめざす授業が明確になり、その取組みを組織的に行うことで学校が活性化するのではないかと考えます。

神奈川県立総合教育センター

平成 25 年 3 月

学校経営のキーワード

授業改善を考える前に、学校経営のキーワードについて考えます。

学校経営にあたっては、まず、学校のビジョンを示すことが第一であり、校長先生方は、生徒の実態、地域性、学校の特色など、様々なことを考慮してビジョンを立てていることと思います。次に、ビジョンの実現に向けた戦略を明確にし、実践につながる具体的な手立てを全ての教職員が共有することが大切です。そして、ビジョンの実現ができたかどうかを振り返ります。この振り返りも教職員全員で共有し、ビジョンの実現ができていない場合はどうすればよいかを皆で検討します。

ここでは、こうした学校経営の流れを、「ビジョン」、「ストラテジー（戦略）」、「プロセス」、「リフレクション（振り返り）」の4つのキーワードで押さえます。

4つのキーワードと授業改善

学校経営の中心に授業改善を位置付けるということは、前述の4つのキーワードを授業改善の視点で考えるということになります。

具体的には、学校としてめざす学校像である「ビジョン」を、授業改善の視点から考えると、めざす生徒像となります。「ストラテジー」はめざす生徒像を実現するための方針、「プロセス」はストラテジーを踏まえためざす生徒像実現までの過程、「リフレクション」はめざす生徒像の実現ができたかどうかの評価と次年度の計画として考えることになります。

学校経営の4つのキーワードと授業改善の視点

ビジョン

管理職として、学校経営の方針を示します。

めざす生徒像の実現に向けた方針

学校教育目標を踏まえた「授業で育みたい力」や「めざすべき授業」を明確にします。その際、生徒の実態を踏まえた課題を全教職員で共有します。

ストラテジー

ビジョンの実現に向けた戦略を明確にします。

学校全体で取り組む方策

「めざす生徒像」を実現するための方策を明確にします。学校として共通に取り組むこと、授業づくりの視点となるものを示します。

プロセス

実践にあたって具体的な手立ての共有を図ります。

めざす生徒像実現までの過程

「めざす生徒像」を実現させるためのプロセスを考えます。その過程は、学校として共有されていることが大切です。

リフレクション

ビジョンの実現ができたかどうか実践を振り返ります。

振り返りによるステップアップ

自分たちの取組みについて、振り返りをします。そして、ビジョンとリンクさせて考え、成果や改善点を見だし、次の取組みにつなげます。

組織的な授業改善の取組事例

各学校で進められている取組みについて、普通科高校、専門高校、総合学科高校など、学校の特色に合わせていくつかの学校の実践をまとめました。学校によってめざす生徒像は異なり、ビジョンも戦略もプロセスも違っているでしょう。しかし、学校の特色が違っていても、共通する取組みがあるはずです。それぞれの取組みの中に、参考にしていただけるものがあると思います。

ここに挙げた事例をヒントとして、各学校において組織的な授業改善が進められることを期待しています。

事例1 研究テーマを明確に示し、目標を共有した事例

事例2 授業観察の有効活用を通して授業改善を進めた事例

事例3 講師招聘による研修会を活性化した事例

事例4 具体的な型を提示することで組織的な授業改善の実績をつくった事例

事例5 リフレクションを共有することで主体的な取組みにつなげた事例

事例6 教科を越えて向かうべき方向性を共有した事例

* 本冊子を作成するにあたり、いくつかの県立高校を取材し、4つのキーワードをもとに、各校の授業改善の取組みについてお話をうかがいました。ここでは、各校における様々な取組みの中から、それぞれのキーワードに関連した特徴的な取組みに焦点をあてて紹介します。

研究テーマを明確に示し、目標を共有する

この高校では、授業改善の推進に向けて校長がその取り組みの道すじをつくるために、5月初旬に実施した授業改善に関する説明会で研究テーマを明示しました。初めに目標を明確化し共有することで、組織的な取り組みが進んでいます。

ビジョン

学校が目指す「授業」の定義

- ・教職員が共通理解を図りやすい目標を「夢中になる授業」とする

ストラテジー

取り組みの流れをつくる

- ・総合教育センターのカリキュラム・コンサルタントを活用する
- ・すべきことを校長からでなく、研究主任に説明させる

プロセス

教師の自覚を促す

- ・「生徒による授業評価」の結果を用いた現状分析を行う

リフレクション

変容を数値で表す

- ・生徒による授業評価の結果を活用する
- ・定期テストの無答率を調査・分析する

全教職員を対象に、5月に行った説明会では、授業改善の取り組みについて、その道すじを提示しています。

その道すじとは、説明会にはじまり、研究授業と校内研修会の実施へとつながる年間の計画です。

5月の説明会では、教職員が授業改善の方向性をイメージしやすいように、研究テーマを「夢中になる授業」とし、課題意識を共有しやすくするため、研究授業を実施した後、それを踏まえて研修会に参加するようにしました。

また、大学教授の講演や、総合教育センター指導主事による演習も行い、授業改善に向けた意識向上も図っています。

日程的に非常に厳しいスケジュールでしたが、校長は「教職員一人ひとりには高い能力をもっている」と考え、全員で取り組む道すじを示しました。そして、研究会後に、「学ぶ力の育成や知識を伝えるだけでなく、生徒が自分で考え、気づき、理解することが重要だ」といった感想を、教職員から得たそうです。

11月には、2日間にわたって研究授業を行い、自教科の授業と他教科の授業を見て研究協議を実施しました。研究テーマである「夢中になる授業」を踏まえた授業について、教科の特性に関係なく生徒の様子を観察し、ねらいの実現を確認することで、研究協議の充実を図っています。

このように、研究テーマを明確に示すことが、組織的な取り組みを進めるポイントです。今後の取り組みの見通しがもてるような働き掛けが大切です。

取り組みの道すじ

5月初旬 全教職員への説明会

研究テーマ「夢中になれる授業」

5月 研究授業①
研究授業②

5月30日 校内研修会
(外部講師の招聘、他校への公開)

11月6日 研究授業③ 自教科
11月8日 研究授業④ 他教科

今後

- ・自校で付けたい学力の再確認
- ・指導と評価の計画の見直し
- ・定期テスト(記述)の無答率集計
- ・学習状況調査結果の活用

校長先生の一言

校長は流れをつくるだけで、言いたいことがあってもぐっところえ研究担当の先生に言ってもらうことを心掛けています。先生たちはやることの趣旨がわかれば、取り組んでくれます。研究授業もまずはやってみることが大切です。実践してみると、教職員から様々な工夫に関する意見が出されます。

管理職の役割として必要なことは、教科会など、教職員の話合いの場を設けることです。先生たちの取り組みやすい環境を整備することが管理職の責任だと考えています。

授業観察の有効活用を通して授業改善を進める

この高校では、「管理職による授業観察」を、授業改善の推進のための大切な機会と捉え、組織的な授業改善に向けて有効活用しています。学校としてめざす授業を観察の視点として事前に提示し、授業後に個別の面談を行う中で、そうした授業が実現していたかどうか協議します。授業観察の視点は全体で共有しているので、個々の取組みが組織的な取組みへとつながるのです。

ビジョン

「生徒主体の授業」の定義

- ・「教える、教わる」から「学ぶ、学ばせる」授業へ

ストラテジー

「管理職による授業観察」の活用

- ・ペア・グループワークを取り入れた授業を管理職が観察
- ・授業観察後の個人面談で行う具体的なアドバイス

プロセス

日常的な授業参観の機会をもつ

- ・公開研究授業であっても、特別視することなく、普段行っているペア・グループワークを取り入れた授業の一コマとなっている

リフレクション

「生徒による授業評価」の活用

- ・生徒による授業評価に、ペアワークやグループワークに関連した項目を追加することを検討する

全ての教職員の授業を管理職が観察できる機会を有意義なものとするために、年度当初に授業づくりの方向性、戦略を示します。

まず学校として「生徒が主体的に学習する授業の実現」をめざし、『教える・教わる授業から、学ぶ・学ばせる授業へ』をキーワードとした授業を提案しました。そして、そのために「課題を与える」、「ペアワークやグループワークを取り入れる」、「生徒同士に学び合わせる」、「生徒の学ぶ状況を常に確認して、適切な課題を与え、指示する」という具体的な戦略を伝えます。これが、授業観察の視点です。

また、視点に合わせて、授業観察時に授業者が事前に作成し提出していた「授業観察用資料」も整えました。授業者に「学ぶ・学ばせる」ための工夫・ポイント等を明示させ、教職員の意識付けを図ったのです。

そして、観察後には、3人の管理職がそろって面談を行うようにし、協議する中でよりの確な指導・助言が行えるようにしました。授業観察の視点に沿って、具体的な助言をしています。

この取組みを通して、授業観察の視点は、学校としての授業づくりの視点となり、日常の授業づくりや教科ごとの研究授業等においても、個々の教職員が意識して取組みを進めています。

授業観察の主な観点

- ① 目標やねらいが明確であり、わかりやすい授業となっているか。
- ② 「教える」「教わる」に偏ることなく、「学ぶ」「学ばせる」に重点をおいた授業になっているか。
- ③ ペアワークやグループワークなど、生徒の主体的活動を取り入れているか。
- ④ 生徒の「学び」を引き出し、全員が学ぶ環境をつくっているか。
- ⑤ 生徒同士が「学び合う」授業となっているか。
- ⑥ 生徒の学ぶ状況を常に認識して、適切な課題を与え、指示をしているか。

校長先生の一言

生徒の能力を伸ばし切れていないという現状に目を向け、全教職員が統一目標をもって授業改善に取り組まなければならないと考えます。生徒が着席し、板書を写しているだけでは、「授業が成立している」とは言えません。生徒主体の授業をめざし、「教える・教わる授業」から「学ぶ・学ばせる授業」への転換をめざすことを教職員に説明したところ、その趣旨に賛同し、自発的に取り組んでくれています。

講師招聘による研修会を活性化する

この高校では、受け身になりがちな講師招聘による研修会を、その持ち方を工夫することで、主体的な研修会へと変化させました。そのことで、個々の教職員の主体的な取組みが生まれています。

ビジョン

学校教育目標に則った授業づくり

- ・夢に向かってチャレンジする力を育てる
- ・社会の変化に対応し、時代を切り拓く力を育てる
- ・自ら課題を発見し、主体的に解決する力を育てる

ストラテジー

外部講師の招聘

- ・学校がめざす授業に合う講師を招聘し研修会を実施する
- ・研修会に先駆けて、講師の考え方を共有する

プロセス

授業改善の視点を随時発信

- ・職員会議で授業改善に向けた資料を提示し、解説する

リフレクション

卒業生アンケートの検証

- ・在学中に身に付けた力の中で卒業後に役立っている力を調査し、生徒に身に付けさせたい力を検証する

組織的な授業改善を推進するために、講師招聘による研修会を実施している学校は多いことと思います。一人ひとりの教職員が考えを深めるために、または、個々の実践を振り返る機会として、講師招聘による研修会は有効です。

この高校では、大学教授を招聘した研修会の実施に向けて、講師の考え方を学び共有するための事前研修会を実施しています。講演依頼の際「自分の考えを理解した上で聞いてほしい」と講師の要望があったことから、研修会の実施となったものです。その結果、事前に講師の考えを知ることができ、研修会への意識が高まり、さらに全体で学ぶ機会をつくったことで組織的な取組みにつながっています。

また、「特別研究授業」（12月実施）として、講師と担当教職員による公開授業も実施しています。TTによる授業ということで、学習指導案作成や教材準備等、事前に講師と綿密な打ち合わせがなされ、担当教職員だけでなく他の教職員も授業づくりに対する意識が高められました。

当日は、数学の授業が公開され、授業の進め方、教材の工夫、生徒の学習活動等々、授業改善のヒントを全員で共有できました。今後、学校としてめざす授業の実現に向けて、組織的な取組みが期待できます。

講師招聘による研修会の実施の流れ

1 講師決定

学校がめざす授業改善の視点に関連した考えをもつ講師に研修会を依頼、「特別研究授業」を企画する。

2 事前研修会の実施

「特別研究授業」に向けて、講師の提唱する考え方でもある「教えて考えさせる授業」について研修する。

- ▶ 副校長による講義
- ▶ 年次会での情報共有
- ▶ 「特別研究授業」に向けた準備

（指導案検討、教材作成、展開の打ち合わせ等）

3 研修会の実施

「特別研究授業」（講師と担当教員のTTによる公開授業）を実施する。

- ▶ 「教えて考えさせる授業」の参観により、生徒に考えさせるための工夫を共有
- ▶ 「教えて考えさせる授業」の講義
- ▶ 質疑応答

校長先生の一言

本校には、総合学科高校として、4つの特色科目があり、教職員はチームで指導にあたり、生徒は探究学習に取り組んでいます。「組織的な授業改善」の下地は整っているのですが、それを教科学習に波及させることが課題です。

「特別研究授業」に向けた教職員主体の取組みは、話を聞くだけの研修会が、個々の課題を解決するための研修会につながったと思います。また、生徒の生き生きと学び合う様子を参観し、協同的な学びが教科学習にも必要なことが実感でき、今後の授業改善の取組みが楽しみなところです。

具体的な型を提示することで組織的な取組みの実績をつくる

この高校では、「机の配置をコの字型にすること」、「1 単位時間の中にグループ学習を必ず取り入れること」を校長から提示し、実践することから始めました。教職員は試行錯誤しながらも実践を重ね、実践を共有する中で、組織的な取組みが進んでいます。

ビジョン

自ら学ぶ生徒を支える教師

- 目指しているものは「優れた授業を行うこと」ではなく「一人残らず生徒の学びを実現すること」である

ストラテジー

授業スタイルの変換

- グループ学習を授業に取り入れる
- 机の配置をコの字型にして授業を行う

プロセス

教職員の意欲を高める仕掛け

- 環境整備
- 広報活動（情報発信と来校者の受入）
- 中学校との連携

など

リフレクション

実践して良かったことを共有

- 初めから成果を求めず実践する
- 授業を共有し、良かったことを取り入れることで授業改善につなげていく

授業改善の視点として「自ら学ぶ生徒の育成」を掲げ、「自ら学ぶとは、自分たちで考え、協同し、一歩踏み出すこと」と定義し、それを授業で実現させるために、校長から机の配置をコの字型にし、グループ学習を取り入れるという授業スタイルの提案をします。具体的な形を示すことでイメージを共有し、考えるよりやってみようという発信したのです。

ここで示された授業スタイルは、授業改善を意識付けるためのもので、大きな成果を期待したものではなかったかもしれません。しかし、コの字型の机の配置やグループ学習の良さを生かした授業展開を工夫することで、授業改善に向けた組織的な取組みが動き始めています。

そしてその過程では、授業改善につながる様々な仕掛けが考えられています。

例えば、新しい授業スタイルの考え方や進め方について、わかりやすく解説した資料を校長が作成し提示することで、やってみようという意欲を引き出しています。また、授業をビデオや写真に撮り、授業者に渡して振り返りを促したり、良い取組みを共有したりすることで認められる喜びや教職員同士の刺激につながっています。さらに、生徒の変容を教職員で共有し、学校としての取組みの意味付けをしています。

「授業改善を進めたい」という校長の思いを発信し、具体的な形を示すことで、取組みが始まり、一人ひとりの実践が積み重なって、組織としての取組みが形づくられています。

教員の意欲を高める仕掛け

環境整備

グループ学習に役立つように紙製のホワイトボードとペンを大量に用意したり、大型プリンターを設置したりと環境整備に力を入れました。これにより、これらを活用した授業づくりが進んでいます。

情報の発信

自分たちの取組みを価値付けるために、校長が外部へ情報発信をし、積極的に来校者を招いています。良い評価を受けることで教職員の意識が高まり、授業づくりへのモチベーションも高まっています。

中学校との連携

近隣の中学校でも同様の取組みがあり、生徒が中学時代にどのように学んでいるのかを知るために交流を始めました。互いの授業参観や、合同での研究フォーラムの開催等、取組みが進んでいます。

校長先生の一言

「授業を変えよう」というメッセージを伝えるために、机の配置をコの字型にしました。トップダウンです。慣性から抜け出す手段として形を示すことを選びました。「やってみないとわからないでしょう」と教職員の共通理解を図り、導入したのですが、初めの半年は何も変わらず、「今までの方がよかった」という教職員も出はじめ、失敗かと落ち込んだこともありました。

しかし、教職員たちはこの間も新たな授業づくりを試行錯誤していたのです。半年が過ぎた頃、その工夫が成果につながりだしました。課題はありますが互いの工夫を交流し授業改善が進められています。

リフレクションを共有することで主体的な取組みにつなげる

この高校では、教科会が授業改善の場であるとして、教科での話し合いを充実させ、さらに、教科ごとの話し合いの内容を全教職員で共有しています。職員会議での教科会の報告は、教科間の理解を深めるだけでなく、個々の教職員にとって、自分の考えや実践が全体の中で認められたという自信となり、互いの刺激となって、教職員の主体的な取組みにつながっています。

ビジョン

学校としての「良い授業」の定義

- ・ 発展的な内容を含む教材を精選する
- ・ スピーディーな授業展開を目指す
- ・ 思考力・判断力・表現力を育成する生徒の活動を取り入れる

ストラテジー

年度当初にスケジュールを確定

- ・ 研究発表会、授業互見週間、教科会等の日程を計画する
- ・ 報告様式を初めに提示しておく

プロセス

中心となる教職員からの情報発信

- ・ 職員会議での提案や、教科会の通知、教科会の結果報告等は、校長からではなく、教諭からの発信とする

リフレクション

教科会の充実と振り返りの共有

- ・ 個々の振り返りを共有する場として教科会を設定する
- ・ 教科会報告を推進担当グループが集約し、職員会議で共有する

4月末の職員会議で、授業改善の目標と研究テーマについて提案し、互見授業、生徒による授業評価の活用、授業研究発表会等の年間計画と、それぞれの取組みに関連して、教科会での事前検討や事後の振り返りを位置付けます。その際、報告様式を提示して、教科会での検討結果を学習推進グループに提出することを確認し、教職員に振り返りを意識付けます。

例えば、互見授業後の教科会では、成果と課題について、この高校で定義した「良い授業」であったかどうかについて協議します。また、生徒による授業評価についての教科会では、結果分析と今後の授業の方向性について話し合い、授業づくりの視点はどこにおくか、生徒に身に付けさせたい力は何かなど、教科内で再確認します。

そして、教科会後に各教科から提出された報告は、学習推進グループが集約し、職員会議で報告をします。

＜互見授業に関する教科会報告から＞
(教科会でのまとめから抜粋)

- 他教科の授業を参観して、生徒の活動を上手に取り入れると生徒の取組みが前向きになるように感じ、生徒の活動を積極的に取り入れていく必要性をあらためて確認できた。
- 他教科の参観者があり、「理科は教える概念が多くて、たくさんを説明するのに工夫が必要」という他教科との違いという視点から指摘を受けることができた。

年間の予定

5月中旬～下旬	研究授業（国語、数学、外国語） <u>授業後の教科会</u>
6月11日～29日	授業互見週間
6月22日	公開研究授業 (国語、公民、数学、理科、保健体育、外国語) <u>教科による研究協議会</u>
6月25日	生徒による授業評価
7月13日	<u>授業改善のための教科会</u> (生徒による授業評価の分析)
10月11日	授業研究発表会 (教科会で検討した指導案で実施)
12月3日	生徒による授業評価
12月4日	授業実践報告会 (<u>授業改善のための教科会</u>)
2月5日	<u>授業改善のための教科会</u> (生徒による授業評価の分析)

校長先生の一言

その学校にとってベストな授業を考えることが第一歩です。それをわかりやすく教職員に示すことが必要です。初めに授業改善の方針を全教職員で共有できたならば、あとは計画に従って進めるだけです。

計画の中で重要なことは、授業研究発表会の実施と教科会の充実です。

教科会報告の集約（リフレクション）を職員会議で担当教諭が読み上げています。それは、教職員一人ひとりの授業改善に対する思いの詰まった文書となり、校長にとってはまさに宝物です。

教科を越えて向かうべき方向性を共有する

この高校では、専門高校として、そして全日制・定時制のある高校として、学校をひとつにすることを課題としています。そのために、学校目標の趣旨をわかりやすくしたスローガンを掲げ、学校として向かうべき方向を示しました。授業改善に向けた取組みもその中で組織的に進められています。

ビジョン

教師の自主性の尊重

- ・先生たちは「やる力」をもっているので、良かったことをアドバイスする

ストラテジー

大きな流れの調整

- ・基本は担当主任に任せ
- ・3年間同じことを繰り返していると言えり化するのでカンフル剤を打つ

プロセス

生徒を前面に出した学校運営

- ・周年式典の計画を生徒が運営に携わるように修正した
- ・学校説明会等での、生徒の活躍場面をつくる

リフレクション

「生徒による授業評価」の活用

- ・互見授業や研究授業で提出させた「授業観察シート」の記述を集計・分析し、次回以降の取組方針の検討材料とする

研究授業への取組みとして、企画研究グループを設置し、普通教科教職員、工業科教職員から担当者を決め、年間2回程度（6月と11月頃）の公開授業や研究授業を計画しています。

6月は全教職員による互見授業を実施し、11月には5人（普通科2人、工業科3人）を選定して研究授業を行いました。

11月の研究授業では、授業者以外の教職員全員が5つのグループに分かれ、授業を参観します。グループ分けは、普通教科教職員と工業教科教職員を混合して行いました。普通教科教職員と工業教科教職員の混合グループにしたことで、研究会が学科を越えた知見を得る場となり、協議が深まりました。例えば、工業教科の授業を参観後の協議で、「学習指導の展開の組み立ての段取りがよい」や「習熟度に応じて、個別の対応が丁寧である」などの意見が出されました。これは、実習に多くの時間を費やす工業教科ならではの授業の工夫が、普通教科の教職員に良い影響を与えた成果と考えられます。

以前は、工業教科の中でも、電気科、機械科、建設科と科によって交流が難しい場合もありましたが、近年ではそうしたこともなく、普通科と工業科の教職員も活発に交流をもっています。

「もっと元気な〇〇（学校名）」 ～生徒が主役の学校づくり～

12/1 [全] 学校説明会
12/8 [全] 第二種電気工事士 技能検定
12/9 [全] 第一種電気工事士 技能検定
12/14 [全・定] PC利用技術検定
12/15 [定] 学校説明会
12/19 [定] 生徒会役員選挙
12/19～20 [全] 球技大会
12/22 [全] 学校説明会
12/25 [定] 総合科学学習活動成果研究発表会

平成24年度 神奈川県立〇〇高等学校スローガン

「学校をひとつにまとめたい」という思いをもつ校長の発案で、互いの課程のことについて理解を深められるよう、毎月の全日制と定時制の行事を列挙した掲示物を作成しています。その掲示物には、学校目標の趣旨を生徒にわかりやすく伝えるため意図で作成されたスローガンが掲載されています。

このスローガンは、生徒だけでなく、教職員に対しても、メッセージを伝えています。

校長先生の一言

学校目標は生徒にとって実感にくい、わかりにくいものになりがちです。生徒にもわかる学校目標を示そうと思い、スローガンを作成しました。そこでは、全日制と定時制でどのような行事が予定されているのか、月別一覧も添付し、全日制と定時制の生徒の情報交換の場として、「全定合わせてひとつの学校としてまとめてほしい」という思いを伝えています。

授業改善に役立つ3つのツール

総合教育センターでは、授業改善プロジェクトを推進する中で、授業改善に役立つ3つのツールを作成しました。

* ホームページ上でもこれらのツールを紹介しています

<http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/Snavi/kadaiSnavi/index.html#kaizen>

(総合教育センタープロジェクトのページ 「授業改善プロジェクト」)

授業レリーフシート

授業を参観する際に大切なことは、授業改善の視点を明確にもつことと、生徒の変容を見取ることです。そのためのシートを作成しました。

授業観察用「授業レリーフシート」				授業中 記入用
年 月 日	授業担当者名	科目名	学年、クラス (人数)	観察者名
平成 25 年 6 月 10 日	藤沢 太郎	生物基礎	2 学年 1 組 (39 人)	神奈川花子
本時の評価規準		そのための学習指導の工夫		
<small>※評価規準に対応する学力の3要素の□を塗りつぶす。 (<input checked="" type="checkbox"/> 知識・技能 <input type="checkbox"/> 思考力・判断力・表現力等 <input type="checkbox"/> 学習意欲)</small> ・ワークシートに整理された細胞内の酵素を基に、酵素の基質特異性や多様性といった特徴を見だし、自分なりの表現で記述している。		・既習知識を基に酵素の働く場所を考え、ワークシートに記録させる。 ・ジグソー学習を通して、理解を広げる。 (グループで共有・別のグループで共有) ・見いだした酵素の特徴を記述させる。		
授業の流れ (教材、教師の指示、板書等)		生徒の学習活動、様子		
8:51 本時の活動と既習事項の確認		生徒Aに着目して観察 (◎) : 教科書、WS : ワークシート)		
8:59 『細胞内で働く酵素を調べよう』 個人作業		・下向き、◎「酵		
9:08 4人グループ、情報共有		・「何書けばよかつ ・生徒Bに教えても ・◎から『酵素』		
授業の流れに沿って、参観者は生徒の学習の様子を観察し、メモをとります。				
		授業後の振り返り ○生徒Aの自由記述に酵素の多様性の理解をうかがわせる記述あり、基質特異性に関する記述は無し ○酵素の種類 (合成と分解以外) に興味・関心あり ○ジグソー学習…自他の班の意見交流できていた →ワークシートの記述の充実		
研究項目 (観察の視点) 生徒に身に付けさせたい力が実現されたか。また、生徒にそれが伝わっていたか。		○生徒Aは個人作業の活動を理解してなかった。教員に注意を向かせてから指示を出すようにする必要がある。 →机間巡回でチェックが必要 課題や発問等を板書しておくことも効果的		
授業後に、授業のねらいが実現したかどうかについて、生徒の様子から振り返ります。				
※各校独自項目				

★ 活用のヒント

- ・ 学校としてめざす授業が、授業のポイント (個々の教職員の工夫点) として明示されることで組織的な授業改善が進みます。
- ・ 具体的な生徒の学習の様子を観察することで、教職員の授業スキルではなく、授業の内容を考えることができます。
- ・ 観察する生徒を決めて記録を取ることで、身に付けさせたい力の実現が確認でき、課題も明確になります。参観者が分担をして数名の生徒を観察し比較することも、授業の振り返りや学習活動の検証に有効です。
- ・ このシートを活用して、いくつかの授業を比較検討することもできます。

単元構想シート

単元（題材）を通して授業を構想することが重要です。その際、生徒の実態に合わせて目標や評価規準などを決めることとそれを教科内で共有すること、さらには、校内で共有することが大切です。

単元構想シート		教科（ ） 単元名（ ）				単元（題材）目標			
単元（題材）の 評価規準	観点ごとの評価規準				評価の方法 Cの処理・生徒への手立て	主たる学習活動		指導上の留意点 ポイント	
	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解					
	単元（題材）目標や評価規準を、めざす生徒像に合わせて、教科内で共有することが、組織的な授業改善につながります。								
1	1	<p>単元（題材）の評価規準を基に、具体的な評価規準を設定します。1単位時間に全ての観点を盛り込むのではなく、単元（題材）全体を通してバランスよく配置します。</p> <p>これは、めざす生徒像の実現に向けて、生徒が学習を積み重ねていく「学びのプロセス」です。生徒の実態に合わせたプロセスを、教職員で作り上げることが組織的な授業改善につながります。</p>				<p>めざす生徒像の実現に向けて、「努力を要する」の生徒への手立てを考えます。教科内で共有することで授業改善につながります。</p>		<p>評価規準を基に、めざす生徒像の実現に向けた学習活動を評価の方法と関連させて設定します。</p> <p>その際、学校としてめざす授業（授業形態や授業の流れなど教職員が共有しているもの）が効果的に設定されているか、単元（題材）を通して学習活動につながりがあるか、段階を踏んでいるか等を意識することが大切です。</p>	
	2								
	3								
	4								
2	5								

★ 活用のヒント

- 学校としてめざす授業を共有し、単元（題材）を構想することができます。
- 単元（題材）の全体を見通して計画を立てることができます。これを教科内で共有することが大切です。単元（題材）目標と評価規準を確認し合うことから始めるとよいでしょう。
- 授業研究会等で提示することで、公開した授業の前後の学習が明確になり、授業後の協議が深まります。
- 指導と評価の計画として活用できます。

* 教科ごとの記入例を作成してホームページ上で公開しています。書式のダウンロードもできます。

<http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/Snavi/kadaiSnavi/index.html#kaizen>

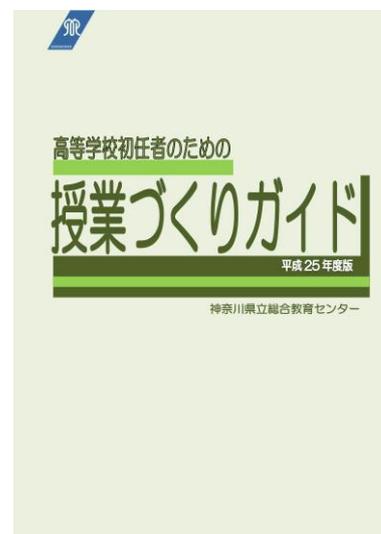
（総合教育センタープロジェクトのページ 「授業改善プロジェクト」）

授業づくりガイド

初任者を対象に、今求められている授業や、授業づくりの基礎・基本についてまとめています。若手教員への支援の際などに、若手教職員とともに活用することをお勧めします。

初任者向けの資料になっていますが、新学習指導要領の考え方や言語活動の進め方の解説など、全ての教職員にとって参考になるものと考えています。

この「授業づくりガイド」は、総合教育センターにおける研修講座等で広く活用しています。



校内研修会への支援

総合教育センターでは、「カリキュラム・コンサルタント」、「校内研修支援パック」、「授業研究ライブラリー」など、校内研修を活性化するための支援をしています。

カリキュラム・コンサルタント

学校のニーズに合わせた所員の派遣や資料提供などの支援を行っています。組織的な授業改善に向けた各学校のニーズにもお応えしています。

★ カリキュラム・コンサルタントの例

- ・ 組織で取り組む授業改善をテーマにする場合
組織づくりのためのワークショップや今求められている授業についての講義など、各学校で直面している課題を解決するための研修会での指導助言をします。
 - ・ 研究協議会の充実をテーマにする場合
公開授業を参観した後、指導主事がファシリテーターとなって、研究協議を行います。付箋を活用したワークショップやグループ協議等、ニーズに合わせた研修会を進めます。
 - ・ 研究の推進の仕方をテーマにする場合
組織的な授業改善を進めるために、その中心となるグループへの研修会を行います。全教職員で取り組むために、中心となる人材の育成はとても大切です。指導主事がニーズにお応えしながら、少人数の研修会もサポートします。
- * 詳細はこちらをご覧ください。ホームページ上でもお申し込みいただけます。
<http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/Snavi/shoinSnavi/karicon.html>
(総合教育センター 「カリキュラムに関する支援」のページ)

校内研修支援パック

各学校で、教職員が講師となって校内研修会を実施する際に活用できるように、総合教育センターの研究成果を電子データ（プレゼンテーション・ファイル、読み原稿、資料など）と利用の手引きをパッケージ化したものを作成し、提供しています。

- * 総合教育センターホームページから、ダウンロードできます。
<http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/Snavi/kensyuSnavi/sienpack.html>
(総合教育センター 「校内研修支援パック」のページ)

授業研究ライブラリー

学校における授業研究・授業改善を支援するため、県内の先生方の授業映像をDVD化したものです。一部については貸出（28本）やインターネット配信（16本）をしています。

- * 詳細はこちらをご覧ください。ホームページ上でもお申し込みいただけます。
<http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/Snavi/sisetuSnavi/librally.html>
(総合教育センター 「授業研究ライブラリー」のページ)